

# 「補正タイム」の「フェアタイム」への改称に関するお知らせ

東京大学大学院 工学系研究科

池上 孝則

マラソンの記録の規格化の研究は2004年のアテネ五輪代表選考に係る混乱を契機として開始し、補正タイムのWebサイトでの提供からも4年が経過いたしました。研究当初から変わらぬご支援を賜り、改めて篤く御礼申し上げます。

そもそも「補正タイム」という言葉は造語であり、「補正值」がその語源に当たります。測定学における「補正」とは、より真の値に近づける為に測定値における偏差(かたより)を修正する操作であり、マラソンの記録に関しては全体的要因(気温や風、高低差といった全出場選手に共通する条件)を均一にする処理に相当します。そこで、「記録の規格化」という全体的要因を均一にする処理を施した値に対して「補正タイム」という名称を付与したものであり、こうした経緯を踏まえるならば、「補正タイム」は学術的に由緒正しい言葉といえます。

しかしながら以下に述べる事情により、研究当初から一貫して使用してきたこの「補正タイム」という呼称に一区切りをつけ、新たな呼称である「フェアタイム(fair time)」に移行することといたしました。関係者各位には、大変、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

## ◆補正タイムの呼称の変更理由

補正タイムの呼称の変更を決意した理由は、主として以下の2点です。

### (1)直感的に意味不明との指摘

直接的には、今年の6月に開催した市民マラソンフォーラム2013において、「補正タイム」の意味が直感的に分かりにくいというご指摘が複数の参加者の方からあったことが契機となっています。「補正という言葉からマラソンの記録に何らかの修正を行うことは想像できるが、何を目的とした修正であり、その結果どのような効果が生まれるのかが言葉からは浮かんでこない」というのがその主旨です。

こうした声は以前から耳にしていたことではありましたが、上記のように学術的に的確な言葉であることから、改称の必要はないと考えておりました。しかし今回は、遠方よりご参集頂いた大会主催者の率直な発言であり、意を汲んだ対応をすべきであると強く感じた次第です。

### (2)国際化における障壁

今年のモスクワの世界陸上における日本のマラソン代表選考においては、国内代表選考レースに加えて、ニューヨーク、ベルリン、シカゴ、ボストン、ロンドン大会において派遣記録を切った選手が代表候補となるという規定が加えられました。しかし、指定された大会でのレース条件は各大会で大きく異なることから、公平性を担保しつつパフォーマンスを評価することは更に困難になると思われます。

例えば、2011年のボストンマラソンは追い風の恵みにより男子の優勝は世界記録を大幅に上回る2:03:02でしたが、翌年の2012年は高温の影響で2:12:40で、1985年以降では2番目に遅い記録でした。もし有力な日本選手が選考レースにボストンを選んだとして、2011年の条件であったら日本記録を上回るかそれに近い記録を出して代表に選ばれたでしょうし、2012年の条件なら2:15:00より遅い記録が想定され、確実に代表から外れたでしょう。

こうした事情は、世界を席卷する存在でありながら海外で開催される大会で代表選考を行うケニアやエチオピアの選手についても同様です。また、エリートランナーだけでなく、各国の市民ランナーにとっても記録の評価の公平性に対する思いは変わりませんから、「記録の規格化」のシステムの海外への普及は急務なのです。

ところで、「補正タイム」を直訳すると「**correction time**」となります。学術的には妥当な用語ではありますが、これでは日本において補正タイムに対して指摘されたような違和感を抱かせることになりかねず、それが海外における普及の妨げになるのではないかという懸念があります。

#### ◆「フェアタイム」の選考理由

上記に示した理由により、現状のシステムにおいて取り組むべき最優先の課題として補正タイムの改称に踏み切ることとしました。ここに、新しい呼称の選定する上での重要な要件として「日本名と英語名が共通であること」、「直感的に目的や効果が分かること」、「既存の意味との関係で混乱を来さないこと」、「学術的に瑕疵がない言葉であること」の4点を設定しました。そして予備知識の希薄な状態でブレインストーミング的に候補となる言葉を列挙し、個々の事案を上記の要件に照らして検証いたしました。フェアタイムに関する検証結果は以下の通りです。

##### ・要件Ⅰ 日本名と英語名が共通であること

日本語と英語で異なる言葉を使用するのではなく、例えば「グロスタイム」や「ネットタイム」のように、カタカナ英語が日本語として使用されることが望ましいでしょう。この点において「フェアタイム」は、「公正タイム」のように用いることもできますが、フェアタイムとしてそのまま使用することができるという手軽さがあります。つまり、日本語と英語が共通の言葉となり、無用な混乱を来すことささないという強みがあります。

##### ・要件Ⅱ 直感的に目的や効果が分かること

一般のランナーや大会関係者に対し、長々とした説明がなくても言葉の響きから直観的に意図するところが伝わるような言葉が望ましいでしょう。この点、**fair** は日本人にとっては「市場」とか「博覧会」という名詞よりはフェアプレイのように「公平な」とか「平等な」といった形容詞としての使用が馴染深いと思われます。したがって「フェアタイム」という言葉の響きから「フェアタイムを用いればグロスタイムやネットタイムより公平に記録の評価や比較ができるのであろう」と直感で効果を推察できるのではないのでしょうか。

##### ・要件Ⅲ 既存の意味との関係で混乱を来さないこと

改称する言葉が既に特定の概念を有して流通しており、その為に混乱を来すようであれば選考から外すべきでしょう。この要件に関しても「フェアタイム」はほとんど造語に近く、日常用語として流通している言葉ではなさそうです。言葉に色のついていないが故に既存の概念と混乱することもないでしょうから、この点においても好都合です。

##### ・要件Ⅳ 学術的に瑕疵がない言葉であること

記録の規格化は普遍性を担保する科学的処理であるので、その結果である規格化された値も学術的な見地から瑕疵のない妥当な用語でなければなりません。ここに、「記録の規格化」は「真の値」を導く処理というよりは、「個々の大会における気温や風、高低差といった全体的要因による影響を均一にする処理」という意味合いが強く、それゆえに処理結果は同じレース条件の下での記録を表すことになり、異なる大会の記録であっても公平に評価又は比較することができるのです。すなわち、学術的な観点においても「フェアタイム」は処理の効果を的確に示した言葉であると言えます。

上記の要件に加えて、音の響きや文字数なども配慮し、さらに外国人の意見も参考にして総合的な検証を行った結果、最後まで残った言葉が「フェアタイム」であったということです。

なお、検証においては補正タイムも含め、リアルタイム、ピュアタイム、ジャストタイム、規格タイム、標準タイム、トゥルータイム、シミュレーションタイム、フラットタイム、フィットタイム、リタイムなど様々な候補を検討しましたが、いずれも何某かの要件に不備が指摘され、採択には至りませんでした。

#### ◆おわりに

以上の経緯を踏まえ、「補正タイム」の新たな呼称として最終的に「フェアタイム」を採用することといたしました。

2004年の研究開始以来使用してきた「補正タイム」という言葉には少なからず愛着もありますし、「フェアタイム」に「予期できなかった問題が発生することはないか」、「ランナーの間に自然に浸透していくだろうか」といった不安がない訳ではありません。その一方で、近い将来に改称の必要性が生じていたことも確かです。改称を「いつやるの？」と言われて「今でしょう！」と答えるタイミングだったと言うことだと思います。

チャールズ・ダーウインはその著書「種の起源」で、「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるわけでもない。唯一生き残るのは、変化できるものである。」と書いているそうです。改称を決断した以上、つまらない感傷に浸って時間を潰している訳にはいかず、生き残りをかける覚悟で新しい呼称の普及に全力投球することといたします。

なお、「補正タイム」の「フェアタイム」への移行は2013年7月21日を予定いたしております。皆様方には大変、ご迷惑をおかけいたしますが、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。